

【シンポジウム報告】

第40回日本基礎老化学会シンポジウム@名古屋

杉本 昌隆

国立長寿医療研究センター研究所

2020年2月9日(日)に、中部大学名古屋キャンパス三浦記念会館大ホールにて、第40回日本基礎老化学会シンポジウムを開催した。本シンポジウムは、当初は2019年10月に行う予定であったが、台風19号の影響により同日へと延期して開催された。日程変更にも関わらず、ご講演頂いた演者の先生方、ご参加頂いた皆様には、誌面を借りて感謝申し上げたい。

令和に入って初となる第40回シンポジウムでは、筆者と中部大学の山下均先生が世話人を務め、「細胞の質的变化から紐解く老化と老年疾患」をテーマに、学会内外から筆者を含め6名の演者が講演を行った。シンポジウム参加者総数は演者を含め83名であり、そのうち50名以上を非学会員が占めた。またアカデミア以外に、製薬企業からは20名以上の方にご参加頂いた。

前半のセッションでは筆者、大阪大学・原英二先生、京都大学・井垣達吏先生の3名が、細胞老化の視点から組織老化や老年疾患のメカニズム解明にアプローチす

る研究について、講演した。組織老化における細胞老化の役割については古くから示唆されていたが、最近になって漸くその因果関係が実験的に証明されている。細胞老化によって惹起・促進される組織の老化は、様々な(加齢性)疾患の原因や増悪化因子となることが多くの研究によって明らかになり、ここ数年非常に注目を集めている分野のひとつである。筆者と原先生は、哺乳動物をモデルとして、細胞老化が組織の老化や疾患に関わるメカニズムについて解説を行い、細胞老化が加齢性疾患の創薬標的として有望であることを示した。井垣先生は、ショウジョウバエをモデルに細胞老化の生理学的役割に関する研究を紹介した。興味深いことに、細胞老化制御の根幹となる部分は進化的に保存されており、ショウジョウバエを用いた研究は、そのスループットの高さからこの分野においても強力なツールとなることが期待される。欧米諸国と同様に、日本国内においても製薬企業を含めた多くの研究者が細胞老化に着目しており、今後の発展が大いに期待される分野である。



会場の雰囲気

連絡先：杉本昌隆

〒474-8511 愛知県大府市森岡町 7-430

TEL：0562-46-2311

E-mail：msugimot@ncgg.go.jp

後半のセッションでは、国立長寿医療研究センター・多田 敬典先生、京都府立大学・亀井 康富先生、名古屋大学・菅波 孝祥先生の3名が、加齢に伴って多発する代謝疾患に、細胞生物学的側面からアプローチする研究について講演を行った。多田先生は、加齢と慢性ストレス環境変化により共通して生じる内分泌システムの変化が、脳認知機能障害を引き起こす分子メカニズムから、動物モデルを用いた行動実験について、亀井 康富先生は、代謝変化がサルコペニア病態に及ぼす影響について、また菅波 孝祥先生は加齢とともに生じる慢性炎症と代謝系臓器障害の関係を、詳細な分子機構からマウスモデルを用いた個体研究まで幅広く解説を行い、ヒト疾患への適用について考察が加えられた。

以上の講演をもとに、当日は来場者との間で活発な議

論が交わされた。老化や加齢性疾患の研究は、世界の医学・生物学研究者にとって間違いなく最も大きな課題であり、本シンポジウムが若い研究者の方々に問題を提起し、老化研究の発展に多少なりとも貢献できたのではないかと考える。

シンポジウム終了後には、名古屋大学医学部レストラン鶴友にて懇親会を開催した。懇親会には32名が参加し、参加者同士が情報交換を通じて親睦を深め合い、大変有意義な会となった。

尚、本シンポジウムは日本老年医学会の後援、および公営財団法人大幸財団の助成を受けて開催された。